前期日程

令和２年度入学試験問題（前期日程）

国　　語

（教育学部）

―――― 解答上の注意事項 ――――

1 「解答始め」の合図があるまで問題を見てはならない。

2 問題冊子１冊と解答紙２枚がある。

3 問題は３問ある。（すべての問題に解答すること。）

4 問題の解答は，解答紙の所定の解答欄に記入すること。

5 問題冊子は持ち帰ること。

一　次の【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】は、図書館のあり方について書かれたものである。これらの文章をよく読んで、後の問いに答えなさい。なお、筆者はいずれも公共図書館の職員である。（設問の都合上、原文を一部改めたところがある。）

【文章Ⅰ】

ここからは、未来の図書館のあり方について考えたい。

従来図書館では、本や雑誌、新聞などの提供を通じて来館者にサービスを行ってきたが、最近ではその来館目的にも変化が起こっている。

その原因はインターネットの登場だ。インターネットが普及するにしたがって、人の情報収集の方法は大きく変化した。時間や場所を問わず容易に情報が入手できる時代になり、検索エンジンは計算したように情報を瞬時に返してくる。そんな効率やスピードを追求した情報収集が日常化するなかで、A図書館にはその反対の価値を求めて人が来館する。

先日、ある人がまちづくりについての本を探しにやってきた。彼の暮らす場所は県立図書館から一〇〇キロメートル以上も離れている。県立図書館の本はホームページで検索でき、地元図書館からも取り寄せができるのに、なぜわざわざ来館したのだろうか。その理由を尋ねると「棚から本を選びたいから」という答えだった。都市工学の棚を案内すると、彼は、縮退した海外の都市再生プロジェクトの事例集や広場の写真集、スイスの建築家の伝記などを手に取った。さらに彼から「最近読んで面白かった本はないか」と尋ねられたので、発酵の歴史や宇沢弘文（うざわひろふみ）（鳥取県出身の経済学者）の本を紹介すると、「他者が推薦する本にはいつも新しい発見がある」とそれらも借りて帰った。

ちなみに彼とのやりとりの中で、書店サイトの本のレコメンド機能についての話になった時に、「レコメンド機能はあくまで自分が入力したキーワードがもとになっている。自分が意図しない本も並ぶ図書館の棚は面白い」と言っていたのが印象的だった。

彼のように、様々なテーマが混在する棚から本を探すことや、カウンターで職員と会話をすること、情報を探すプロセスを自ら体験することなど、一見非効率に思える事柄を逆に大切にしている人が増えている。

「インターネットの登場＝図書館の衰退」という話も数多く耳にしてきたが、実はそうではないと思う。インターネットの存在が逆に図書館の魅力を際立たせる時代になりつつある。

図書館の新たな方向性として次に考えるのは、そこにある「場」を活かし、人と人とがコミュニケーションする場になるということだ。

当館では、地元大学と連携した講演会やビジネスや法律分野の専門家による相談会を定期的に開催しているが、毎回ほぼ満員となる人気の行事だ。また、乳幼児とその保護者向けの「えほんのじかん」や高齢者が声に出して本を読む「音読教室」などにも多くの参加者がある。これらは本に関連させながら開

催しているものだが、そのイベントの中心にあるのは人から人への知識の伝達や双方向のコミュニケーションである。

「えほんのじかん」に参加した保護者同士が子育てについて情報交換をしたり、高齢者が「音読教室」で新たな友人を得たりするのを見ると、核家族化や高齢者の孤独化が課題となっている現代において、図書館が人の集う場所として新たな意味を持ってきているのを感じる。

一昨年訪れたアメリカのニューヨークの公共図書館でも、人が集い交流する「しかけ」を数多く作っていた。ミーティングルームや談話スペース、カフェなどの会話のできる場所を設けていた。ボードゲームやチェス、モノづくりのための空間を提供することでも、共同作業を通じてのコミュニケーションを喚起していた。アメリカでは、移民・難民が地域に親しむ場としても図書館が活用されていたが、外国人労働者やI*・Uターンなる移住が増えつつある日本でも同様の役割を求められる時代が来るのかもしれない。

人と人とのやり取りは、人の好奇心や行動意欲を掻(か)き立て、感情にも訴える。そこから新たな図書館の活用にもつながるはずだ。静寂を重んじてきた図書館だが、人が集いお互いにコミュニケーションをする「空間」や「しかけ」を作ることも必要になると考えている。

そもそも、図書館は公共施設である。この「公共」という言葉を国語辞典で調べてみると、住民が主体的に関わり活動するための場だということが分かる。

（『日本国語大辞典』5［小学館二〇〇一］より）

「公共」　・社会一般、公衆、おおやけ
　　・公衆が共有すること
　　・社会全体がそれに関わること

図書館が情報のハブ*としての機能を果たし、住民どうしの学び合いやコミュニケーションを促すことも一つの方策ではないだろうか。

人間同士のやり取りは、対コンピュータやAIのコミュニケーションとは反対を行くものだ。B AIやコンピュータが幅を利かせる時代に、人との関わりを密にすることで、図書館が新たな存在意義を見出せると考えている。

最後にもう一つ、理想の図書館として挙げたいのは「議論の場」としての図書館である。

図書館のカウンターで資料相談を受けていると、それに付随して様々な話を聴く。大学生のエネルギー自足自給についてのアイデアや、戦争経験者が語る平和哲学、退職した先生の教育論、外国人が語る日本社会への感想など挙げるときりがない。

それらは本に書かれている情報に負けず劣らずユニークで画期的なものだが、社会に発信され伝わることは少ない。毎日のようにそんな話を聴いている

私には、それがとても残念に思える。

先日ドイツを訪れまちづくりや文化政策について学ぶ機会を得たが、現地での説明で印象的だったのは、ドイツの人たちが、社会がどのような方向に進むべきなのかを常に考え、それを他人と「議論」することだった。これによって個人の頭の中にあった考えが具現化し、周囲と共有され、共通理解の上に社会が築かれる。

ここで注目したいのは、頭の中にあるものを声に出すことによって、「個」のアイデアや思考が「パブリック」（公共）のものとして共有されることである。思えば、日本には、考えを「公」にする機会や、議論ができる物理的な場所も少ないのではないだろうか。そこで、図書館が、人がアイデアや思考を表現し、社会と共有する場になるのはどうだろうか。具体的には、図書館を会場に「働き方」「エネルギー自給」「暮らし方」「豊かさ」などの様々なテーマについて議論するイベントを開催し、参加者にお互いの考えを話し合ってもらうのである。

元来、図書館は人の知恵や知識を本という形で収集し、それを社会に還元してきた。それを一歩進めて、人の頭の中に次々と浮かぶアイデアや思考を社会に還元する機能を担う。

これは、常に公平性を保ち、私利私欲と離れた存在である図書館にふさわしい仕事だと思う。長きにわたって図書館に蓄積されてきた「知識や知性」のストックの活用にもつながるはずだ。C 私はここに図書館の未来を感じている。

（高橋真太郎「人と共にある図書館の未来は明るい」より）

注　I・Uターン……IターンとUターン。Iターンは、都会の出身者が地方に就職して定住すること。Uターンは、地方から都会に出た人が故郷へ戻ること。

ハブ……ネットワークのつなぎ目となる部分。結節点。

【文章Ⅱ】

最近、「にぎわい創出」、「地域活性化」という惹句(じゃっく)とともに、これからの図書館のすがたが喧伝(けんでん)されている。しかし、単に住民が集い、イベントなどを通じて交流が生まれ、地域コミュニティを元気にするというのであれば、図書館でなくても構わないのではないだろうか。人々は、あるいは自治体関係者は、図書館に何を求めているのであろうか。

最近話題の図書館の動向を伝える報道のキーワードは、「来館者数」である。いかに、多くの市民がその場を訪れたかによって、「にぎわい」や「活性化」の政策目標が評価されている。

しかし、図書館は、教育基本法、社会教育法の精神に基づいた図書館法によって規定された教育文化施設である。そこでは、図書館法が目的として掲げる「国民の教育と文化の発展」にキヨする施策が中心となって取り組まれ、そうした観点での評価がなされるのが本来のあるべき姿である。それは、計量化できるものであれば、貸出冊数や予約・リクエスト数であり、調査相談件数やデータベース利用者数、資料複写件数などである。また、利用者満足度調査などの項目で、「得たい知識が得られた」、「暮らしや仕事の課題が解決できた」などの質問への回答がどの程度の高い割合を占めるかである。

しかし、そうした基本に沿って運営してきた図書館よりも、ファッショナブルなデザインをまとい、カフェや書店も複合したスタイリッシュな図書館のほうが、多くの市民の来館を生むこととなった。そして、目標を上回る来館者数は、教育文化施設としての評価を飛び越えて、多くの市民の支持を得た施策の成功として物語られるのである。

しかし、そこに、図書館と称するにふさわしい「ものがたり」は、存在しているのだろうか。そこに求められているのは、図書館を利用して「知的欲求を満たす」とか「人生の意味を探る」といった「体験」ではなく、「知的欲求が満たされる場にいる自分」という意味や記号の「消費」なのではないだろうか。

図書館が、雰囲気を味わうものとしても親しまれることはむしろ歓迎すべきことでもあろう。しかし、サービス提供サイドが、こうした「コト消費」にショウジュンを合わせて施設計画や運営をしてしまうと、本来的な図書館の目的や機能がソガイされてしまう。そのことは、避けなければならない。

「ものがたり」というと、小説のストーリーを想像されるかもしれない。もちろん文学が私たちに与えてくれる物語は、人間という存在の不思議さ、怖さ、尊さ、そして生きることの意味を教えてくれる芸術だ。そうした人間が生活し、働き、人生を送る日常は、その人にとっての「ものがたり」の連続である。人間、社会、自然、宇宙などシンラ万象の書物、情報を扱う図書館は、それを求める人々の「必要」という欲望の背景にある「ものがたり」が、持ち寄られる「場」である。

そして、図書館という機能は決して建物にだけ表れるものではない。以前、滋賀県旧永源寺町の図書館(現東近江市立永源寺図書館)に勤務していたときのことである。移動*図書館で山間部の巡回場所に行ったとき、初めて来た初老の女性が、「脊柱管狭窄症(きょうさくしょう)」とメモした箸袋を持ってきた。曰く、知人はこ

の病気を薬で治してもらったが、自分は手術をしなくてはならないと医師が言う。その説明を聞いても納得できないから、この病気について書いた本はないか、との主訴。移動図書館には、「*家庭の医学」しか積載されておらず該当記事の記載がなかったため、本館に戻ってこの病気についてだけ書かれた書籍を調べたところ、その女性の疑問を解くだろう記述が見つかった。電話するとすぐにお嫁さんが借りに来てくれた。さて、ひと月後の巡回の日。その女性は果たして本を返却に移動図書館車を訪れた。そして、曰く、「書いてあることが全部わかったわけではないけれど、どうやら私は手術をしなくてはならないみたいだわ」と。

医師の説明では納得できなかった女性は、しかし、自ら求めた本に向き合い、読み解くことで、納得を調達し、諦観の中でも主体的に治療に向き合うことを決心したのだった。

また、ある夏休みのこと。常連の小学生三人が、羽根のきれいな昆虫を虫かごに入れて図書館にかけこみ「これ、なんていう名前の虫？」とたずねた。一緒に昆虫図鑑を使って名前を見つけると、子どもたちはしばらく図鑑をめくって他の虫にも関心を示した。そして、次の日、小さな水槽に入れた魚を図書館に持ち込んだ子どもたちは、「魚の図鑑はどこですか？」とたずねた。ここでは、子どもたちの姿勢が、知識を教えてもらうという受動的なものから、自ら知識を調べるという能動的なものへと質的な変化を遂げている。知らないことを教えてくれる本という存在、そして、調べてわかることの楽しさを、子どもたちは、「虫の発見」→「名前を知りたいという知的好奇心の発露」→「図書館の人に聞いてみる」→「本で調べればわかる」という体験を通して知ることとなった。そして、魚とりをして、その名前を知りたいと思い、「図書館の本で調べよう」という、知的好奇心を満たすための方法を一般化する経験を持ったのである。

図書館という機能がある「場」では、こうした資料が介在する「ものがたり」が無数に、そして多彩に繰り広げられている。図書館に飾りがあってもよい。けれども、飾りだけでは、人びとの「ものがたり」は、生まれないだろう。なぜ、図書館でなくてはならないのか、というその一点が、しっかりと実現するのであれば、どんな衣装をまとってもかまわない。

（嶋田学「図書館と『ものがたり』――地方から考えるこれからの図書館」より）

注　移動図書館……書籍を積んだ自動車で、図書館から離れた地域を定期的に巡回し、図書館のサービスを提供する仕組み。

「家庭の医学」……一般家庭向けの医学書の一つ。

問一　傍線部ア～エのカタカナを漢字に直しなさい。

問二　傍線部A「図書館にはその反対の価値を求めて人が来館する」とあるが、「その反対の価値」とは何か。本文中の語句を用いて説明しなさい。

問三　傍線部B「AIやコンピュータが幅を利かせる時代に、人との関わりを密にすることで、図書館が新たな存在意義を見出せると考えている」について、次の問いに答えなさい。

(1)　「幅を利かせる」の本文中における意味を、十字程度で記しなさい。

(2)　「新たな存在意義」とは何か。本文中の語句を用いて簡潔に答えなさい。

問四　傍線部C「私はここに図書館の未来を感じている」について、「ここ」が指す内容として最も適切な箇所を、本文中から二十五字以上三十字以内で抜き出し、始めと終わりの五字を書きなさい。

問五　傍線部D「図書館と称するにふさわしい『ものがたり』」とは何か。本文中の事例を踏まえて分かりやすく説明しなさい。

問六　【文章Ⅰ】と【文章Ⅱ】とでは、図書館が果たすべき役割に関し、主張の違いがみられる。それぞれどのように考えているか。次の条件①～③を踏まえて記述しなさい。

条件①　おのおのの主張の重点がどこに置かれているのかを明らかにすること。

条件②　おのおのの主張の重点を対比させ、その違いが明確になるように述べること。

条件③　一四〇字以上、一六〇字以内で述べること。

二　次の文章は『曾我物語』の一節である。〔　〕の部分を踏まえて本文を読み、後の問いに答えなさい。（設問の都合上、本文を改変した箇所がある。）

〔源頼朝（ここでは佐殿）は平治の乱で敗れて伊豆に流され、頼朝の監視役となった伊豆の豪族・北条時政の娘の政子（姫君）と恋愛関係になる。時政が大番役として京都の内裏警備を勤めている間に、頼朝と政子に娘が生まれる。時政は都から伊豆の北条へ帰る途中、後妻からの手紙によって、頼朝が政子のもとに通って婿となっていること（婿取る由）を知らされる。〕

北条、かの文を披きて見給へば、思ひも寄らず婿取る由を書かれければ、北条、大きに騒がれけり。驚き給ふも理なり。当国の目代、和泉判官平兼隆を都にて①婿に取りてんげり。彼は平家の侍といひながら一門なりける上、婿に取つて国に下りけるあひだ、三年の大番なりけるを別の人に申し替へて同道して下りける。その上、都にても道すがらも、家子・郎等に至るまで色々互ひに芳心し、まして、国へ下着せば一国の成敗たるべき由、約束したりけるほどに、「いかがはせん」と思はれける。

ここに時政、両眼を塞ぎて、「つらつら往事を思へば、時政が先祖上野守直方は、伊予守頼義公、奥州下向の御時、北条が館へ入らせ給ひし折節、婿に取り奉りて、やがて奥州へ御供申し、事故なく平治しぬ。御男子数多出で来させ給ひしほどに、いよいよ浅からず思し召して、大御台と申しけると承る。この御腹の君達は、八幡太郎義家・賀茂次郎義綱等、子孫ますます繁昌して、その末々は久しきぞかし。時政が家に源氏を婿に取りて後、頼もしく繁昌する例ぞかし」と思ひ廻らす時は、「あながちに嫌ひ思ふべきにはあらず。然れども、都にて目代を婿に取り、芳心せられ下るなれば、いかがはせん」と思はれけるが、また、うち返して思はれけるは、「よしよし。ただ空知らずして、宿所へは帰るべからず。目代とうち連れて伊豆の国府へ着きつつ、知らず顔にもてなし姫を呼ばんに、安かるべし」と驚く心を押し鎮めて、目代とうち連れ、府庁にこそは着かれけれ。

然れども、北条は思ひ延べたる方ぞなき。「姫は一人なり。婿は二人あり。目代は我が取りたる婿なり。佐殿は姫が志深き婿なり。いかがはせん」とぞ思ひ煩ひける。女房の方へ言ひ遣はしけるは、「時政は、目代とうち連れ府庁に留まり候ひぬ。当時は神拝さらに隙なく、参り得ず候ふ。都にて目代を婿に取りて候ふ。急ぎ姫を具足して来たらせ給ふべし」とありければ、継母の女房、大きに喜びて、「万寿を目代の方へ遣はすものならば、我が娘を佐殿に合せんものを」と内々に喜ばれけるこそはかなけれ。やがて姫君を②呼びまゐらせ、「これこそ北条殿の御文よ」とて見せられければ、姫君これを御覧じて、胸もうち塞がり、泣くより外のことぞなき。継母、「こは。疾く疾く出で立ち給へ」と責め奉り給ひければ、姫はこれを聞くにつけても、「実の母ならば、これほどに情なきことはよもあらじ」と思ふにぞ、いとど涙は進みける。思ひ分けたる方ぞなき。出で立たんとすれば恩愛の別れも悲し。また、留まらんとすれば不孝の罪遁れがたし。

折節、佐殿は物へ御他行の後なり。馴れ来し方の事どもを語り置くべきやうもなし。「ともかくも行きてこそ見め」と思はれければ、心ならず出で立ち給ふ。泣く泣く御文をあそばして留め置かんとせられければ、佐殿は物より帰り給ひける。北の方は濡れしほたれておはします。佐殿、この御有様を御覧じて、「こは何事ぞ」と仰せければ、北の方、涙を押へて、「親にて侍ふ時政、都にて妾を目代に約束し候ふなるほどに、府庁より使あり。親の命に随はんとすれば、恩愛離別の苦しみに胸を焦しぬ。偕老の情を忘れじと思へば、不孝の罪遁れがたし。とにもかくにも、もてあつかうたる我が身の置き所なきこそ悲しけれ」と伏し沈み給ふぞわりなけれ。佐殿も共に袖をぞ絞られける。

注　目代……国守の代わりに任国に赴き国務を行う代官。
大番……大番役のこと。内裏及び院の御所や京都市中の警固役。
家子・郎等……家臣たち。
芳心……親切をつくすこと。
一国の成敗たるべき由、約束したりける……伊豆の国の政務を任せることを兼隆が時政に約束した。
頼義公……源頼義。
大御台……大臣・大将・将軍などの妻を敬って言う言葉。
八幡太郎義家・賀茂次郎義綱……源義家、源義綱。
国府……国ごとに置かれた地方行政府。「府庁」は国府の庁舎。
万寿……北条政子のこと。
物へ御他行……どこかへ外出すること。
北の方……妻となった北条政子のこと。

問一　波線部①～③の主語を本文中の語で答えなさい。

問二　傍線部a・bの係助詞「こそ」の結びとなる語を抜き出し、品詞を答えなさい。

問三　文章の前半では、二重傍線部「いかがはせん」とあるように、時政が思案するさまが繰り返し述べられている。それについて次の問いに答えなさい。

(1)　時政は何と何との間で思い悩んでいるのか、説明しなさい。

(2)　時政が思い悩んでいる事柄について気持ちを決めることができないのはなぜか、具体的に説明しなさい。

(3)　時政は思い悩んだあげくにどうしたか、詳しく説明しなさい。

問四　傍線部A「継母、「こは。疾く疾く出で立ち給へ」と責め奉り給ひければ」とあるが、なぜ継母はこのように言ったのか、その思惑を説明しなさい。

問五　傍線部B「我が身の置き所なき」とは、政子のどのような状況と心情を表しているか、具体的に説明しなさい。

三　次の文章は、ある湖にまつわる伝承について述べたものである。よく読んで後の問いに答えなさい。（設問の都合上、送り仮名を省略したところがある。）

邛都県下、有一老姥、家貧孤独。毎食、輒有小蛇、頭上戴角、在牀間。姥憐而飴之食。後稍長大、遂長丈余。令有駿馬、蛇遂吸殺之。令因大忿恨、責姥出蛇。姥云、「在牀下。」令即掘地、①愈深愈大、而無所見。令又遷怒殺姥。蛇乃感人以霊言、瞋令、「A何殺我母。当為母報讐。」②

此後、毎夜、輒聞若雷若風、四十許日。百姓相見、咸驚語、「汝頭、那忽戴魚。」是夜、B方四十里、与城一時俱陥為湖。土人謂之為陥湖。③

C唯姥宅無恙、訖今猶存。漁人採捕、必依止宿。毎有風浪、輒居宅側、恬静無他。D風静水清、猶見城郭楼櫓、冥然。④

（『搜神記』による。）

注　邛都県……地名。
老姥……老女。
牀間……寝台のあたり。
令……長官。邛都県の知事をいう。
忿恨……憤って恨む。
感人以霊言……人に乗り移って霊が話しかける。
四十許日……四十日ほど。
汝頭、那忽戴魚……おまえの頭は、どうして魚を乗せているのだの意。魚が頭に乗るというのは、水死することの予兆。
土人……土地の人。
恬静無他……穏やかで静かであり、害がない。
楼櫓……やぐら。敵の様子を見るための高楼。
旻然……整然としたさま。

問一　傍線部①～④の文中における読み方をすべてひらがなで記しなさい。（仮名遣いは新旧どちらでもよい。）
①　因　②　愈　③　乃　④　為

問二　傍線部Aを書き下し文に改めなさい。なお、「讐」（あだの意）は「讐（しゅう）を」と読むこと。（仮名遣いは新旧どちらでもよい。）

問三　傍線部Bを口語訳しなさい。なお、「陥」の意味が明らかになるように訳すこと。

問四　傍線部Cについて、なぜ「姥宅」のみが「無恙」だったのか。本文の内容に即して、その理由を答えなさい。

問五　この伝承において、邛都の街はどうなったのか。傍線部Dを踏まえて答えなさい。